

# *Cape Cod* におけるソローの反文明思想 —— 難破船、灯台、巡礼始祖に纏わる歴史をめぐって ——

林 南乃加

The Anti-Civilization Ideas of Thoreau in *Cape Cod*:  
Shipwreck, Lighthouse, and History of the Pilgrims

Nanoka HAYASHI

## はじめに

マサチューセッツ州の「折り曲げた、剥き出しの腕」（“the bared and bended arm of Massachusetts”）（Thoreau, *Cape Cod*,<sup>1</sup> 4）であるコッド岬へヘンリー・デイヴィッド・ソロー（Henry David Thoreau）が赴いたのは1849年10月、1850年6月、1855年7月、1857年6月の4度である（Harding 270, 273, 359, 382）<sup>2</sup>。これらの旅の一部分についてソローは1850年1月、2月、12月、1851年1月に“An Excursion to Cape Cod”と題する講演を行っている（Dean 185-97）。コッド岬への旅に基づくソローの著作 *Cape Cod* は、ソローの死後、ウィリアム・エラリー・チャニング（William Ellery Channing）により原稿が編集され、1865年に Ticknor & Fields 社から本として出版された。本著作の題材は1849年の最初の旅行が中心になっており、そこに1850年と1855年の旅行の話が組み込まれる形になっている（Harding 361）。

ソローはウォールデン湖畔滞在中の1846年にメインの森の原生林を旅し、その原始的世界に深い感銘を受けている。1849年のコッド岬への最初の旅はウォールデン湖畔における自然生活およびメインの森への旅に続くソローの意欲的な野性探求だといえる。本著作においてソローはアイルランドの移民船が難破して浜辺に遺体が打ち上げられている光景をはじめ、ウェルフリートのカキ養殖業者との交流、海辺の人々の生活、灯台での宿泊時の様子、最終目的地のプロヴィンスタウンの海岸の様子などを詳細に記している。荒涼とした海、浜辺、住民を活写した本著作はメインの森への旅の記録を記した *The Maine Woods* とともに、ソローの荒野への紀行文として位置づけられているが、野性やインディアンについての観察や旅の記録に比重が置かれた *The Maine Woods* とは異なり、*Cape Cod* は主に海や不毛の砂地としての浜辺、海上交通に関する問題に焦点が置かれ、それらについてのソローの思索を記録した著作となっている。ソローならではのユーモアや軽い皮肉や言葉のもじり、聖書からの引用をアレンジした箇所も随所に見られる。

*Cape Cod* の基調をなす主題として特に注目されてきたのは「難破」（“wreck”）ないしは「死」（“death”）である。例えば Mitchell Breitwieser は、本著作は「死」が主題であると想定し、*Walden* やウォルト・ホイットマン（Walt Whitman）などの他作家と比較関連づけながら「難破」の問題について論じている（144-47）。また、今福龍太はソローが浜辺で目撃した死体にはソロー自身の死の「透視」が重ね合わせられると指摘している（108-09）。本著作に見られるソローの自然観の考察としては Richard J. Schneider の、ソローはコッド岬で測り知れない原生自然としての海と陸に向き合い、数々の「錯覚」あるいは「幻」を経験したと論じる観方がある（“Cape Cod” 184-85）。近年では Ryan Schneider のように、当時のアイルランド移民問題を取り上げ、文化と環境文学的な観点からの考察も行われている（463-70）。ソローと海との関連についても様々な角度から

論じられており、例えば奥田穰一は「結晶」という観点から本著作におけるソローの海に関する考え方に着目している(137)。*Cape Cod*は単なる紀行文であるに留まらず、代表作 *Walden* をはじめとするソローの他作品と同様、自然や人間に関するソローの観方を示す諸要素が含まれていることから、*Walden* との比較、ソローの死生観、自然観、当時の社会情勢との関連をはじめとして、様々な観点から論評がなされている。

本稿では、本著作の要所となる旅のエピソードや行程の記述において、コッド岬の荒野に対するソローの肯定的な姿勢とは対照的に浮上する、ソローの文明批判的な心性に着目したい。ソローは荒涼としたコッド岬の自然の姿に侘しさを感じるところか魅了されたと思われ、例えば、プロヴィンスタウンに向かう道中においては、“My spirits rose in proportion to the outward dreariness.”(32)と述べているように、荒涼とした景観に精神の高揚を感じたほどであった。コッド岬の不毛な荒野に魅了されたソローが、荒野とは表裏一体のものとして鋭敏に反応し、また、思い巡らせたのは文明に纏わる問題であったと思われる。この観点から、本稿はまず、新大陸に向かうアイルランド移民船セント・ジョン号の残骸や乗客の遺体についての記述に着目し、ソローの文明に対する批判的姿勢について考察する。また、18世紀後半にアメリカ政府によって建てられ、維持されているハイランド灯台の役割や灯台守の仕事を丹念に観察している点に言及し、文明に対するソローの懐疑的な思想や批判精神を探る。さらに本著作の最終章“Provincetown”において、17世紀に新大陸に到着したヨーロッパの探検家や巡礼始祖に纏わる歴史にソローが頻繁に言及している点に注目し、アメリカの文明化の原点に関するソローの考え方を検討する。難破船、灯台、巡礼始祖に関するソローの率直な見解は、アメリカの文明とその進展に関わるものであり、ソローがコッド岬から海を眺めつつ、文明の問題に関して、時に歴史を振り返りながら思いを馳せたであろうことを想像させるものである。このような観点から、本稿では *Cape Cod* におけるソローの反文明の思想の検証を試みたい。

## 1. 文明の難破 ——あの世の岸辺に到着するセント・ジョン号——

1849年10月、ソローはチャニングとともにボストンからプロヴィンスタウン(Provincetown)へ船で渡り、その後マサチューセッツ州の本土まで歩いて戻る計画を立てていた。しかし壊滅的な嵐のために船が就航しておらず、また、アイルランドからの移民を乗せた船セント・ジョン号がコーハセット(Cohasset)で難破したことを知り、当初の計画をすぐに変更し、難破の残骸を見るためにコーハセットの海辺に向かうことにした(Harding 270)<sup>3</sup>。海辺には、乗客の遺体、衣服や持ち物、粉々に砕かれた船の残骸などが散乱していた。以下の一節は、ソローが目撃した生々しい遺体の描写である。

I saw many marble feet and matted heads as the cloths were raised, and one livid, swollen and mangled body of a drowned girl—who probably had intended to go out to service in some American family—to which some rags still adhered, with a string, half concealed by the flesh, about its swollen neck; the coiled-up wreck of a human hulk, gashed by the rocks or fishes, so that the bone and muscle were exposed, but quite bloodless—merely red and white—with wide-open and staring eyes, yet lustreless, dead-lights; or, like the cabin windows of a stranded vessel, filled with sand. (CC 5-6)

アメリカ人の家庭に仕えるつもりでやって来たと思われる少女の死体は血を流した痕跡はなく、衣服の切れ端が体にまとわりついており、ネックレスが半ば首に食い込んでいると描写されている。ここで興味深いのは、溺死した少女の遺体が「難破船のねじれた船体」(“the coiled-up wreck of a human hulk”)を、またその大きく見開かれた眼が「座礁して砂がいっぱいに詰まった船窓」(“the cabin windows of a stranded vessel, filled with sand”)をソローに連想させたということである。波の威力にのまれて無残な死を遂げた少女を難破船そのものに喩えるということは、難破したのはあくまで船であるにもかかわらず、あたかも人間そのものがじかに難破したかのように考えようとしているように見える。ここでは、人間の難破のイメージは波の凄まじい威力を物語るとともに、強大で容赦ない自然の力に翻弄される脆弱な人間のありさまが強調されていると考えられる。人間が発明した最初の交通機関は船であると言われるが、船の建造は文明のたまものであり、海を征服して海上を遠方まで渡っていくという人間の意志の具現化であるともいえる。また、おそらくはアメリカの家庭で働くという意志を持ってアメリカに渡ってきた少女の遺体は、文明に貢献することを象徴する一人としても解釈できる。そうした考え方をこの記述のレトリックに当てはめるとすれば、難破したのは、まさに自然に挑戦し、文明を推し進めようとした人間なのだとソローは言っているように思われるのである。

実際、海岸に散らばった船の残骸や遭難者の遺体がソローに印象づけたのは死ぬことの恐怖よりもむしろ、自然の抗うべくもない威力である。ソローは打ち砕かれた船の残骸を見て“... I saw that no material could withstand the power of the waves. ...”と述べ(CC 7)、「波の威力」(“the power of the waves”)に太刀打ちできるものとしての“material”は何もないと感じた。おそらく人類の出現以前から変わらない原始の姿を保ってきたであろう目の前の海に対して一切の物質や人間の力が及ばないことを言うこのような表現は、ソローが3年前にメインの森のクタードン山頂で畏敬の念を抱いた巨大な“Matter”(The Maine Woods 70)から成る世界に人間が侵入することができないと悟ったときの衝撃の大きさを述べた表現にも通底するものである。ソローは海の持つ自然の壊滅的な威力に圧倒され、それに対して人間が抵抗する余地を見出すことができず、“I sympathized rather with the winds and waves, as if to toss and mangle these poor human bodies was the order of the day. If this was the law of Nature, why waste any time in awe or pity?”(CC 9)とし、人間の遺体のほうにではなく、「自然の法則」(“the law of Nature”)のほうに同情を寄せる。Breitwieserは“Cape Cod is a book in which many sorrowful things are described but in which there is little sorrow. ...”とした上で、“... there is some outright cruelty in the narrator’s [Thoreau’s] attraction to the sublimity of the sea’s murdering force. ...”と論じている(147)。Breitwieserが指摘するように、本著作には人間の死に対するソローの悲しみや哀愁の表現がほとんど見られず、海の殺戮的威力にソローが魅了されているように見えることには確かに残酷ささえ感じられる。しかし、コーハセットで起きた難破、遭難者の遺体、何事もなかったかのように平然と仕事をする町の人々の光景はソローにとって揺るぎない「自然の法則」を確信させ、「自然の法則」の永遠性に対して人間の生命がいかに限られているものであるかを如実に物語るものだった。今福龍太は、「人間の個としての死と肉体の破壊の悲劇は、むしろそのような状況をやむなくつくり出さざるをえない風や波にたいする同情に置きかえられ、この転倒したソローの倫理学の皮肉が、逆に私たちの生命観の人間中心的な非寛容をあばきたてる」と述べ、ソローの倫理の「転倒」によって、破壊された人間の肉体は皮肉にも自らの非寛容的な側面を明らかにしていると指摘している(100)。今福の見解にあるように、ソローが人間の肉体死よりも「風や波」に同情したことは人間批判に繋がる皮肉であると解釈できる。ソローの「自然の法則」への同情は、自然の力を前になす術もない文明人に、自らの技術に対する過信や驕りに気づくことを促すレトリックとなっているのである。またソ

ローは、そうしたレトリックをとおして、文明人が自然によって打ち負かされる運命にあることを、人間の肉体の死という実際の現実と照らし合わせて訴えているのである。Laura Dassow Walls はソローが浜辺で見た少女の遺体の光景について、“There on the beach Thoreau witnesses America churned up and torn to pieces, for the horror is not simply the girl’s broken body but how and why it got there, and the world closing like water smoothly over her coffin, over all the coffins, without remark.”

(36) と述べ、ソローは単に少女の引き裂かれた遺体ではなく、その遺体が浜辺に漂着した原因やいきさつに恐怖を覚えたのだとし、ソローが浜辺で見たのは引き裂かれたアメリカであり、棺の上に押し寄せる水のように世界が終焉する様であったと述べている。Walls はソローは浜辺に横たわる少女の遺体をとおして恐怖を覚えたのであり、アメリカひいては世界の崩壊を目の当たりにしたのだという見解を示している。しかしソローは、世界の結末への連想から恐怖を覚えたというよりもむしろ、遺体が散らばる浜辺において、人間の無残な死のあり様とは対照的に、自然の無謬性に対する畏怖の念を抱いたのである。ソローにとってその浜辺には「自然の法則」が支配する世界がなお厳然と存続しているのである。そこに二項対立的に浮上するのは自然の無限性と人間の有限性との矛盾であり、「自然の法則」の持つ永遠性の前に崩壊してゆく人間の姿に他ならないのである。

自然の威力によって不運にも落命した者の遺体について、ソローが以下のように述べる点に着目したい。

Why care for these dead bodies? They really have no friends but the worms or fishes. Their owners were coming to the New World, as Columbus and the Pilgrims did, they were within a mile of its shores; but, before they could reach it, they emigrated to a newer world than ever Columbus dreamed of, yet one of whose existence we believe that there is far more universal and convincing evidence—though it has not yet been discovered by science—than Columbus had of this. . . . (CC 10)

この一節でソローは、死者たちを15世紀の大航海時代におけるクリストファー・コロンブス(Christopher Columbus) や16世紀の巡礼始祖たちのような新大陸を目指してアメリカへやって来た人々と対比させ、死者たちはコロンブスが夢見ていた「新世界」(“the New World”) よりも「さらに新しい世界」(“a newer world”) へと「移住した」のであると述べる。ここで「新大陸」と対比される場所としての「さらに新しい世界」とは、婉曲的に死後の世界つまり天国を表現していると考えられる。その世界は科学によって証明されるものではなく、「はるかに普遍的で説得力を持つ証拠」(“far more universal and convincing evidence”) が存在するところであり、コロンブスの新大陸発見以降、巡礼始祖やその子孫によって徐々に文明化されていった地上のアメリカとはまったく異次元の世界である。この一節には、アメリカの文明化を担うべく渡来した移民が、難破という自然がもたらした悲劇によってではあれ、あたかも未来の文明大国アメリカよりも天国へ移住するほうがより良い世界へ行くことになったのだと言わんばかりの辛辣な皮肉が感じられる。あるいはソローは、自然の威力によって遭難した者たちが、見せかけだけの偽りのユートピアすなわちディストピアとしての未来の文明大国アメリカではなく、天国という正真正銘のユートピア的世界に向かうことに安堵あるいは羨望さえ覚えているのかもしれない。死者の横たわる浜辺の描写には、文明と自然の対照性が浮上するとともに、惨劇に遭った移民をただ悼むだけにとどまらないソローの複雑な感慨が漂っているのである。コロンブスや巡礼始祖と対比された移民が目的地の港に辿り着くことができなかったセント・ジョン号の犠牲者にソローは、アメリカの文明そのものの難破を連想したのではないだろうか。本著作においてレトリックとしての皮肉の要素が頻繁に見られ

ることを想起するならば、ソローがそのような考えていたとしても不思議ではないと思われる。

難破した移民は、逆説的に、地上よりもより高い次元の世界へ昇天した人々として描かれる。ソローによると、“Heaven”よりも“Boston harbor”のほうがよい場所だと思っている地上の人々からすれば、難破者は文字どおり難破したことになるのだが、ソローはむしろ “. . . a skillful pilot comes to meet him, and the fairest and balmiest gales blow off the coast, his good ship makes the land in halcyon days, and he kisses the shore in rapture there, while his old hulk tosses in the surf here.” (CC 10) とし、セント・ジョン号はあの世の岸辺に到着し、水夫は練達の水先案内人から温かく迎えられ、歓喜とともにあの世の岸辺に口づけをするのであると比喩的に述べている。ソローはあの世の岸辺に辿り着いたセント・ジョン号の犠牲者を「自然の法則」と運命をともした人々とし、肉体よりも精神の崇高性を強調することで、最大限の弔辞を表明する。

It is hard to part with one's body, but no doubt, it is easy enough to do without it when once it is gone. All their plans and hopes burst like a bubble! Infants by the score dashed on the rocks by the enraged Atlantic Ocean! No, no! If the St. John did not make her port here, she has been telegraphed there. The strongest wind cannot stagger a Spirit; it is a Spirit's breath. A just man's purpose cannot be split on any Grampus or material rock, but itself will split rocks till it succeeds. (CC 10-11)

ソローは肉体と精神とを対照的に捉えた上で、肉体に別れを告げることは辛いことだが、一旦肉体がなくなってしまうえば肉体なしに生きるのはごく容易なことであると述べる。幼子たちは荒れ狂う大西洋の波に襲われ、二重にも折り重なって岩に叩きつけられた悲惨な運命を遂げ、セント・ジョン号に乗っていた人々の希望は肉体とともに泡のように消え去ってしまったのである。しかしソローは、この世の港とあの世の港とを対比させ、この世の港に辿り着けなかった彼らは、あの世の港には電信のように送り届けられているのであり、人間の「精神」(“Spirit”)がどんな強風にもひるまない永遠性を持ったものであることを強調する。このようにソローが精神を強調して寄せる哀悼の意は、ソローが度々痛切に問題視する、物質文明によって抑圧された人間精神をめぐる諸問題を想起させており、文明人の精神の再生あるいは昇華を示唆するものであるとも解釈できる。Ryan Schneider は、セント・ジョン号の犠牲者に対するソローの感傷性に欠ける態度は、結局はソローの超絶思想の信念を物語るものであり、“. . . corpses are only meaningful insofar as they serve to remind us of the greater significance of the individual soul's relation to nature writ large.” と述べ、数々の遺体は個々人の魂と自然との関係がもっと重要なのだということを想起させる限りにおいて意義がある、と述べている (468)。肉体よりも精神を優位とするソローの考え方は、*Walden* の中心的な章 “Higher Laws” において明らかであるようにソローの思想の根幹に存在している。このことをふまえると、ソローがセント・ジョン号の犠牲者の遺体を淡々と観察記録していることや弔いの表現はソローの超絶思想の一端の表れであることは否定できないであろう。ソローは哀悼の意として、肉体の死とは対照的に、遭難者の精神を風という自然になぞらえて、人間精神の不滅性に思いを馳せ、人間の神秘が自然と一体化したことを讃えるかのように文明人の精神の救済あるいは再生を示唆する。それはソロー流の、文明の犠牲者に対する弔い方であると言えよう。

## 2. “The Highland Light” における高次の光

*Cape Cod* は海と陸地に対するソローの視点が交互に入れ替わる章構成となっていることはしば

しば指摘されている。しかし本著作では海と陸の二元的構造に加えて、さらに興味深い構造を見出すことができる。海と陸地のコントラストの中で、海と陸地の境界をなす特異な位置を占める灯台についての章が“The Highland Light”である。海と陸の境界をなす地点において、海の交通の安全を陸から見守る灯台の役割について思索するソローが、やがて地上的なものと、それを超越した宗教的なものに思いを馳せていくというふうには、この章の海と陸の平面的な二元的構造の上に、さらに垂直的な二元的構造が作り上げられているという点が注目されるのである。ソローの著作群には、地上的で具体的な事象についての叙述に、絶えず抽象的で場合によっては宗教的ともいえる思考が随伴しているが、船の難破や灯台を見て回ったという地上的事象についての叙述を装ったこの紀行文においても、ソローの真意は究極的には人間の精神のあり方を主題とする抽象的思考において表明される。具体的で地上的な事象についての叙述が抽象的思考に跳躍する際にしばしば力を発揮するのは比喩などの文学的レトリックである。そうした文学的レトリックの効果によって、ソローの思考と叙述は弾みを獲得し、同時にそれを読む読者の思考もソローの抽象的思考を滑らかに追跡することが可能となるのだと思われる。そうした点を念頭に置きながら、灯台についての叙述に出てくるレトリックに注目したい。

コッド岬への4度の旅でソローはハイランド灯台を毎回訪れている。Hardingによるとソローは1849年10月にハイランド灯台に一晚宿泊し、灯台守が灯台に点火するところについて行った。1850年6月には再びハイランド灯台を訪れており、5年後の1855年7月にはハイランド灯台に隣接した“the Stage House”に2週間宿泊し、1857年の最後の旅でもハイランド灯台で3日間滞在している(384)。ソローは浜辺で海を眺めているとき自分は「陸の生き物」(“a land animal”)であることを痛感したと述べているが(CC 96)、「ハイランド灯台」においては、以下に見ていくように、灯台から海を眺めることで抽象的で宗教的とも言うべき思考が活性化され、「陸の生き物」であった時とはやや異質の高次元の視点を獲得したかのように思われる。灯台のモチーフは、ソローの思考にそれほど大きな刺激を与えたのである。

ソローが滞在した「鉄の冠のような屋根が載った、白塗りで、見るからに堅固な煉瓦作りの建物」(“a substantial-looking building of brick, painted white, and surmounted by an iron cap”) (CC 132)としてのハイランド灯台は、「アメリカの「主要な沿岸灯台」の一つ」(“one of our ‘primary sea-coast lights’”) (CC 118)としてコッド岬の先端部分に建っている。ソローがこの灯台の仕組みや燃料などについて言及するときにアメリカ政府に言及していることに明らかであるように、この灯台の建立および維持には、当初から政府が関与していた。ハイランド灯台の建立に関する歴史的な背景をまとめているJeremy D’Entremontによると、“Dangerfield”として知られていたパメット(Pamet)で難破が頻繁に起きていたことと、コッド岬周辺で船舶交通が増量したことを背景に、灯台建立の要請を受けた連邦議会は、灯台建立のために1796年に\$8,000の費用を割り当てた。連邦の灯台運営の監督者が中心となり、トルーロー(Truro)の住民から10エーカーの土地を買い取って灯台が建てられることになった。そして、1797年11月に、灯台守の住居や納屋、油を貯蔵する倉庫とともに、八角形で45フィートの高さの灯台が就役することになった。

実際、“The Highland Light”においてソローは、灯台をめぐる歴史的背景を意識するかのようには、前章から引き続き難破の問題に目を向けている。ソローはこの章で海による岬の浸食、砂丘の形成、潮流、嵐の様子、強風や大波、海難事故、灯台から見た海の景色など、海を巡る思索や描写を多く盛り込んでいる。この章では灯台の明るいイメージとコントラストをなすかのように、荒涼とした海のイメージが克明に浮かび上がってくるのだが、その中でも海難事故についての記述が頻出することは注目に値する。ソローは1700年の入植期のトルーローが“Dangerfield”と呼ばれていたことに言及し、当時の遭難者についての記録が刻まれた墓石や、強風によって多くの人々が死ん

だことに触れ、海難事故の歴史の深刻さを確認している。トルーローの東海岸に沢山の船が打ち上げられた1794年以降、灯台が建てられたのであるが、トルーローの東海岸では今日でも毎日のように1、2隻の船が難破しているとソローは述べている (CC 124-25)。またソローは、イギリスの軍艦サマーセット号が難破したことに触れ、セント・ジョン号が座礁した2週間後にトルーローの住民が夫婦と見られる2人の死体を見つけた際、男の頭部が切断されているのに衝撃を受け、海の壊滅的な威力とともに海難事故のもたらす人間の死のグロテスクさと深刻さに対する認識をあらたにしている (CC 128)。ハイランド灯台は、このような難破の危機を回避するべく政府の方針によって建てられたのであった。

そのような灯台に対して、ソローは強い関心を示している。ソローは “. . . we wished to make the most of so novel an experience, and therefore told our host that we would like to accompany him when he went to light up.” (CC 132) と述べ、レンガ造りで白塗りの灯台に宿泊した際、灯台守が灯台に点火するところについて行きたいと申し出たと記している。灯台守が灯台に点火する瞬間を見るために螺旋階段を登って灯室に辿り着いたソローは、そこでガラス窓に囲まれた反射鏡の内部に置かれた15個のアルガン灯に灯台守が次々と灯火するのを見届けた。ソローが灯台の構造や仕組みを細かく観察する点には、海上に光を届けようとする灯台に対するソローの共感が窺える。

ソローによると灯台守の仕事上の努めは「石油を補充し、灯芯を揃え、点火し、反射鏡をきれいに磨いておくこと」(“to fill and trim and light his lamps, and keep bright the reflectors”) であつた (CC 132)。また、灯台守の任務についてソローが “. . . he struggled, by every method, to keep his light shining before men.” (CC 134) と述べているように、灯台守は人々に光が届くよう常に努めなければならない責務を負っていた。以下の一節は、灯台守に対するソローの反応が最も率直に見受けられる箇所だといえよう。

“Well,” he said, “I do sometimes come up here and read the newspaper when they are noisy down below.” Think of fifteen argand lamps to read the newspaper by! Government oil!—light enough, perchance, to read the Constitution by! I thought that he should read nothing less than his Bible by that light. (CC 134)

ソローは、灯台守が政府によって供給された灯油の光で新聞を読むよりも、聖書を読んでほしいとひそかに考えている。この時、暗い海を照らし、人命を守るという重大な責務を負った命綱としての灯台の光は、ソローにとって、単に人命を救う目的につながる物理的な光線という側面よりも、形而上的あるいは宗教的な比喩としての光の意味合いのほうが強く感じられたのではないだろうか。海に光を届けることに専念する灯台守の仕事は、荒れた暗い高波から人命を守り、難破をもたらす海に対処する術を備えた、美德のあるものであったといえる。当時の海難事故を報道した新聞の役割、またそうした過去の歴史を背景にして政府によって灯台建設の動きが促進されたに違いないということをふまえると、新聞よりも聖書を読んでほしいという言い方は一見、事態を素直に踏まえていない逆説的なものの言い方であるように見えるだろう。ここには、地上の生活の安全性や利便性をもたらそうとする文明社会における具体的実践よりも宗教的な意味での永遠の救済といったものにまず注目するソローの心的傾向が表れているのである。

このような灯台守についてのソローの記述は、新約聖書に記された、イエスの弟子たちと光との関係を想起させる。イエスは弟子たちを「世の光」と表現し、「そのように、あなたがたの光を人々の前に輝かし、そして、人々があなたがたのよいおこないを見て、天にいますあなたがたの父をあがめるようにしなさい」と述べている(「マタイによる福音書」、第5章14、16節)。『岩波キリ

スト教辞典』においては、この光は「イエスとその福音を意味する」ものであると解釈されている(918)。灯台の光は、このような聖書の一節によって裏付けられた光の持つ神聖な意味合いと関連していると考えることができる。灯台の光は人々を遭難から救うという地上的な役割を担うものであるが、灯台守による点火はそうしたことを超えた精神的、天上的なものとしてソローの目に映ったのであろう。灯台守はその天上的なイメージとしての光を人々に届け、またそれを常に維持する神聖な存在としてソローの心に留まったのである。灯台守はソローにとって単に海難事故を防ぎ人命を救出するという現世的で世俗的な次元に生きる人というよりも、人間を高次の次元へと誘う存在として崇高化されているのである。新聞よりも聖書を読んで欲しいという灯台守に対するソローの要望は、自分の心の中ではなくんだこうした灯台守についての神聖なイメージを日常的な事象の報道の道具である新聞の持つ地上的で俗世間的なイメージで壊されたくないというきわめて個人的な欲求の発露であると考えられるが、それとともに、文明の進展と拡大を支える近代的な道具であると言えるジャーナリズムの一形態である新聞が、孤独で静謐な思索に相当であるはずのこの人里離れた灯台にも進出してきていることへの反感を抑えられなかったのであると考えることができよう。ジャーナリズムや新聞に対するソローの反感は、社会改革思想についての著作“Slavery in Massachusetts”や“Life Without Principle”においてもしばしば見受けられ、それらはいずれも文明批判の一環をなすものと見なすことができる。

航海の発達とともにその有用性を増してきた灯台は、文明のすぐれた利器の一つであることは疑いないが、ソローの思弁的な目に映るハイランド灯台は、船の航海の安全を守るために、自然の獍猛な力が逆巻く荒海に接した場所に人間が建てた文明的な建築物というよりもむしろ、人間をより高い次元へと導く敬虔な導師の居所であるべきものとして聳えているのである。導師には導師にふさわしい読み物があるはずだというのがソローの考えだったのであろう。

そのような不満はあったものの、ハイランド灯台で灯台の光と灯台守の仕事の重要さに心を打たれたソローは、その晩、少なからず安堵感を抱く。“The Highland Light”の章の結末部では以下のように述べられている。

The keeper entertained us handsomely in his solitary little ocean house. He was a man of singular patience and intelligence, who, when our queries struck him, rung as clear as a bell in response. The light-house lamps a few feet distant shone full into my chamber, and made it as bright as day, so I knew exactly how the Highland Light bore all that night, and I was in no danger of being wrecked. (CC 137-38)

灯台守が灯台で温かくもてなしてくれたこと、そして灯台守が稀に見るほど忍耐強く知的であったことに心を打たれたソローは、寝室に灯台の光が燦々と降り注ぎ、夜中もずっと白昼のような明るさであったことに安心し、海上で難破の危機と隣り合わせにある人々とは対照的に、自分は決して難破する恐れはなかったと述べる。荒涼とした暗闇に包まれた海を航海する人々の命を難破から守る象徴的な場所としての灯台の一部は、ソローがその晩に独占することのできた“my chamber”となり、光に満ちた臥所となるのである。ソローは灯台において、現世的な領域ではなく神域に最も近いところに横たわっているかのような心理的恍惚感や精神の高揚感を覚えたことを、比喩的に、かつ強調的に示しているといえる。

### 3. 巡礼始祖とアメリカの歴史家に対するソローの批判的見解

Cape Cod の最終章 “Provincetown” においてソローは、一つ前の章 “The Sea and the Desert” から引き続き、旅の目的地であったプロヴィンスタウンの町の自然、景観、住民の暮らし、行動などについて注意深く観察している。“Provincetown” の最も際立った特徴は、ソローが、17世紀に巡礼始祖たちがコッド岬に投錨した歴史や、それ以前の時代の探検者たちについて思索していることである。この港町はソローの心に、その港に纏わる歴史的背景を沸々と想起させたのである。

“The Sea and the Desert” においてソローはプロヴィンスタウンの広大な砂地の美しさを強調している。ソローはトルーローの町からプロヴィンスタウンへ向かう岬の手首に当たる部分を通り過ぎてマサチューセッツ湾側に渡り、プロヴィンスタウンで最も灌木の茂った、アララト山と呼ばれる海拔100フィートもある砂山に登った。そこへ向かう途中でソローはさまざまな美しい形と色彩をもった砂地に感銘を受け、興味深い蜃気楼現象を目撃したと記している (CC 150)。町を砂の侵略から守っている丘や沼地を砂山の頂上から見下ろしたソローは、果てしなく広がる砂地の景色一面が「どこまでも続く不毛地帯」 (“the universal barrenness”) であるとともに「えんえんと続く砂漠」 (“the contiguity of the desert”) であると表現し (CC 152)、一帯が砂漠を想起させる不毛地帯であることを報告している。その「砂漠」は色鮮やかに紅葉した森と見事に対照をなしており、その美しい風景についてソローは、「コッド岬で見た最も珍しく、目を奪われるような光景」 (“the most novel and remarkable sight that I saw on the Cape”) であると述べている (CC 153)。その自然の風景に心を打たれたソローは、その風景をコッド岬を彩る家具に喩えて、「コッド岬の家具調度品の一部」 (“a part of the furniture of Cape Cod”) をなしていたとも表現している (CC 153)。このような砂漠の不毛性と周囲の自然が融合した地帯にソローが反射的に魅了されたのは、砂地が広がって不毛であることが文明化された町の風景とは隔離されたものであり、また、人間の手が触れていない自然がソローに自然美の観照を最も可能な形で実現させたからである。文明化されていないプロヴィンスタウンの荒涼とした風景にソローは思わず高揚感を覚え、プロヴィンスタウンの風景を鮮烈に心に焼きつけた。

不毛な「砂漠」の景観に魅了されたソローは、“Provincetown” において、17世紀の巡礼始祖たちが抱いたコッド岬についての印象に言及する。1620年にウィリアム・ブラッドフォード (William Bradford) 率いる分離派ピューリタンの一行がコッド岬の現・プロヴィンスタウン港に投錨したことから、コッド岬は新天地を求めてヨーロッパから渡って来た巡礼始祖に纏わる地であり、アメリカの歴史的原点ともいえる岬である。ソローは巡礼始祖たちがコッド岬の観察やプリマス植民地の建設に関して記した *Mourt's Relation*<sup>4</sup> から以下の部分を引用している。

... after many difficulties in boisterous storms, at length, by God's providence, upon the ninth of November following, by break of the day we espied land which we deemed to be Cape Cod, and so afterward it proved. . . . And upon the 11th of November we came to an anchor in the bay, which is a good harbor and pleasant bay, circled round, except in the entrance which is about four miles over from land to land, compassed about to the very sea with oaks, pines, juniper, sassafras, and other sweet wood. It is a harbor wherein a thousand sail of ships may safely ride. (*Mourt's Relation* 15-16)

以上のようにソローは、1620年11月11日に、嵐の中で多くの困難を乗り越え、「神の摂理」によってようやくプロヴィンスタウン港に投錨した巡礼始祖が、その港を「良港で快適な入り江」 (“a

good harbor and pleasant bay”)と形容し、オークや松の木、糸杉、サッサfras、その他の香しい木々が海を取り囲んでおり、多くの船が安全に停泊できる港であるとの見方を示したという記述に触れている<sup>5</sup>。ソローはこのような巡礼始祖たちのプロヴィンスタウンについての印象について、“It is remarkable that the Pilgrims (or their reporter) describe this part of the Cape, not only as well wooded, but as having a deep and excellent soil, and hardly mention the word sand.” (CC 199) と述べ、実際に眼前に広がっているのは砂地であるにもかかわらず、巡礼始祖たちが砂に触れることさえせず、岬のこの部分を樹木が生い茂っている地であり、深く上質な土壌を持った地であると述べているのは驚くべきことであると指摘する。ソローは巡礼始祖たちとは逆に、“The greater part of the land was a perfect desert of yellow sand, rippled like waves by the wind, in which only a little Beach-grass grew here and there.” (CC 200) と述べ、その土地の大部分は風によって波打った形状をした砂地であり、こちらやあちらに小さなビーチグラスが生えているだけであったと記している。このような点において、プロヴィンスタウンの砂地の荒野を見たソローと、それを豊かな樹木の広がる立派な土壌であると記した巡礼始祖たちとは、見方の相違が浮き彫りになる。ソローが以下のように述べる点には、巡礼始祖たちの観察が不十分であることが示されている。

... I cannot but think that we must make some allowance for the greenness of the Pilgrims in these matters, which caused them to see green. We do not believe that the trees were large or the soil was deep here. Their account may be true particularly, but it is generally false. They saw literally, as well as figuratively, but one side of the Cape. They naturally exaggerated the fairness and attractiveness of the land, for they were glad to get to any land at all after that anxious voyage. (CC 200)

ソローは、巡礼始祖たちがプロヴィンスタウンを豊かな樹木に囲まれた深い土壌だと記している点は全体的に誤りであるとし、疑問を呈している。1世紀の間に変化があったとはいえ、1世紀前に生い茂った青い樹木を見たと述べる巡礼始祖たちをソローは「未熟さ」(“greenness”)を残していたと述べ、彼らが未熟であったために青緑の樹木が目についたのでであると、“green”という言葉の持つ2つの意味を巧みに利用した言葉遊びの手法でユーモアを交えながら一蹴しているのである。陸地に辿り着くことを熱望していた巡礼始祖たちはコッド岬に辿り着いた歓喜と安堵感ゆえに、その地の一面的な良さを強調したにすぎないのである。

巡礼始祖たちがヨーロッパから新大陸へ渡ってきた歴史的背景については、ソローは無論、念頭に置いていると思われる。前述のようにソローが参照した、巡礼始祖たちによる *Mourt's Relation* 中の報告書では、「神」や「神の摂理」が繰り返し表現されており、巡礼始祖たちが「神」の導きによって新大陸に渡ることができたことが述べられ、「神の栄光」そしてキリスト教の信仰のため、一致協力して市民の政治団体を形成し、ヴァージニア北部で最初の植民地の開拓に貢献しようとする使命感が表明されている (15-18)。船上で“Mayflower Compact”に署名し、信仰上の団結を図った巡礼始祖たちは、自治体を形成するための理想的な土壌を模索していた。ソローは、信仰上の目的を達成しようと厳しい状況を乗り越えて命懸けでコッド岬に辿りついた巡礼始祖たちが、砂地については特に注目せず、自分たちの理念に基づいた共同体の建設という目的に適った上質な土壌であるかのように記していることに対して「未熟」であると皮肉を表しているのである。このような記述には、アメリカの建国の父祖といえる巡礼始祖たちがコッド岬の自然を見誤っていたことに対するソローの批判的姿勢が浮かび上がる。

ブラッドフォードによる *Of Plymouth Plantation* には、新大陸に到着した巡礼始祖たちの思惑が

読み取れる。ブラッドフォードによると、広大な海で様々な危険を乗り越えてコッド岬に辿り着いた巡礼始祖たちは陸地に安全に到着できたことを神に跪いて感謝し、プロヴィンスタウン港を良港と見なした。その後コッド岬を観察した巡礼始祖たちの様子について、以下のように報告されている点を参照したい。

Being thus passed the vast ocean, and a sea of troubles before in their preparation (as may be remembered by that which went before), they had now no friends to welcome them nor inns to entertain or refresh their weatherbeaten bodies; no houses or much less towns to repair to, to seek for succor. . . . Besides, what could they see but a hideous and desolate wilderness, full of wild beasts and wild men—and what multitudes there might be of them they knew not. . . . If they looked behind them, there was the mighty ocean which they had passed and was now as a main bar and gulf to separate them from all the civil parts of the world. (328)

以上の一節からは、広大な海を渡り、様々な危険を乗り越えてコッド岬に到着した巡礼始祖たちが荒れ果てた土地を前にして、歓迎してくれる友人は一人もなく、航海の途中で風雨にさらされ疲労した体を休めることのできる宿や場所などもなく、救いを求めるための家々や町もないという、茫然自失の状況に打ちひしがれるさまが浮かび上がる。彼らの目に映るのはおぞましい荒野、野獣、野蛮人だけであった。彼らの背後に横たわっているのは渡ってきたばかりの広大な海であり、祖国へ戻りたいと思っても、いまや海は旧大陸の文明から彼らを引き離している障壁であり、越えることのできない溝でしかなかったのである。ここではコッド岬の恐ろしいほどの荒野に愕然とした巡礼始祖たちが、身を護る手立ても場所もない状況の中で、生き残る術を模索することにかに必死であったかが容易に窺えるのだが、彼らは文明人としての視点からコッド岬の荒野を見ており、彼らが必要とせざるを得なかったのはある程度文明化された環境であり土壌であったのである。このようなブラッドフォードによる記述をふまえると、コッド岬に渡ったばかりの巡礼始祖たちは、文明的な観点を保持した上でコッド岬を描写したということは歴然としている。

実際、コッド岬に到着した巡礼始祖たちにとって当面の重要な問題は食糧を確保することであり、またその地が彼らの定住地としてふさわしいか否かの切実な判断であった。*Mourt's Relation*によると、彼らは住人の貧しさを示す住居についてある程度偵察をした後、プロヴィンスタウンの海岸はボートが着岸するのに都合が良く、釣りに恰好の場所であり、また土地がトウモロコシを栽培するのに良い土壌であることを確認し、コッド岬に定住することについて具体的に検討を始めた。彼らは誰も住んでいないと思われる住居に侵入し、その家の中の物品をいくらか盗っていくこともあった。その後、真冬の極寒の時期に体調不良者が続出し、食糧不足も懸念されたため、12月6日にコッド岬を出航し別の港へと向かった (28-32)<sup>6</sup>。

巡礼始祖たちは自らの信仰上の目的や理念を果たすための共同体創建を実現しようとしたのだが、その実現可能性については、文明人の観点からはじき出したある程度の目算があったはずである。しかし、結果として彼らはコッド岬の荒野においては成す術もなく彷徨することになった。ソローが彼らを「未熟」と一括りにする点には、巡礼始祖たちがその地の自然を解する観察眼に乏しかったことを示そうとする意図があるといえる。巡礼始祖たちに対するソローのさらなる批判的見解は、以下の一節において露わになっている。

It must be confessed that the Pilgrims possessed but few of the qualities of the modern pioneer. They were not the ancestors of the backwoodsmen. They did not go at once into the woods with

their axes. They were a family and church, and were more anxious to keep together, though it were on the sand, than to explore and colonize a New World. (CC 201-02)

ソローは、アメリカの建国の父祖としての巡礼始祖たちは真の開拓者精神を持ち合わせていない人々であったと主張する。ソローによると、彼らは荒野の中へと斧を持って分け入り、新大陸を開拓し植民地化しようとした人々というよりもむしろ、一つの家族であり、一つの教会であり、一致団結して共に暮らすことを切望した人々にすぎなかった。コッド岬に辿り着いた巡礼始祖たちがその地で荒野を開拓して植民地化するに至らなかったことに対してソローは皮肉を表すかのように、家族または教会という一つの共同体に属する彼らには、コッド岬の荒野を純粋に開拓する精神や素養がなかったということを示しているのである。Richard J. Schneider が、「巡礼始祖たちは不正確な歴史家であっただけでなく冒険心に欠ける開拓者であった」(“The Pilgrims were not only inaccurate historians but unadventurous pioneers as well.”) (184) と述べているように、ソローにとって巡礼始祖たちは、文明化を求めて新大陸にやって来た人々であるため、冒険心には欠けていたのである。

巡礼始祖に対するソローの批判的姿勢と同様、“Provincetown”において顕著に見られるのは、巡礼始祖が新大陸に辿り着いた17世紀以前の、コッド岬の探検者たちに纏わる歴史についてのソローの関心の高さと入念な検証である。ソローは、巡礼始祖たちよりも前に新大陸を探検したヨーロッパの航海者たちに寄り添うかのように、“Voyages”で知られるフランスのサミュエル・ド・シャンプラン (Samuel de Champlain)<sup>7</sup>、北アメリカ大陸を最初に発見したが定住はしなかったイタリアのセバスチャン・カボット (Sebastian Cabot)、1524年にニューイングランド沿岸に15日間留まったイタリアのジョヴァンニ・ダ・ヴェラツァーニ (Giovanni da Verrazzani) などに言及している。ソローはイタリア人とポルトガル人の航海者を「当時の最も際立った航海者たち」(“[t] he most distinguished navigators of that day”) とし、フランス人とスペイン人の航海者たちは想像力と冒険心の面ではイギリス人よりも勝っており、18世紀になっても、新大陸の探検者としてより優れた能力を備えていたと述べている (“The French and Spaniards . . . possessed more imagination and spirit of adventure than the English, and were better fitted to be the explorers of a new continent even as late as 1751.”) (CC 184-85)。ここで着目したいことは、ソローは巡礼始祖たちが新大陸にやって来る以前にフランス人たちが北アメリカ大陸に最初のヨーロッパ人植民地を拓いたということについて、さらに踏み込んだ議論をしているということである。ソローは、1605年にフランス人のピエール・ドゥグア・ド・モン (Pierre du Gua de Monts) とシャンプランがコッド岬を訪れ、さらに翌年にシャンプランが探検し、シャンプランがその探検を記録した“Voyages”には探検の詳細をはじめ、海図や2つの港の水深測量値が記載されていると評価している。ド・モンとシャンプランは、巡礼始祖が渡来する以前にニューイングランドの海岸を探検し植民地を建設したのであるが、その事実をアメリカの歴史家たちがほとんど看過しているということをソローは以下のように指摘する。

It is remarkable that there is not in English any adequate or correct account of the French exploration of what is now the coast of New England, between 1604 and 1608, though it is conceded that they then made the first permanent European settlement on the continent of North America north of St. Augustine. . . . This omission is probably to be accounted for partly by the fact that the *early edition* of Champlain's "Voyages" had not been consulted for this purpose. This contains by far the most particular, and, I think, the most interesting chapter of what we

may call the Ante-Pilgrim history of New England, extending to one hundred and sixty pages quarto; but appears to be unknown equally to the historian and the orator on Plymouth Rock. (CC 179; italics in original)

ソローが驚いたことに、当時、セント・オーガスティン以北の北アメリカ大陸に、ド・モンとシャンプランが最初の永久的なヨーロッパ人の植民地を開拓したにもかかわらず、1604年から1608年の間に、現在のニューイングランド海岸の探検を行った彼らの十分に正確な英語の報告書が全く存在しない。その理由の一つとしてソローは、シャンプランの記した“Voyages”の初版が歴史家たちによって参照されなかったことを挙げている。以上の一節においてソローがシャンプランの“Voyages”の“the early edition”と強調するのは、巡礼始祖たちが1620年に新大陸に辿り着く前に出版された初版の“Voyages”の存在を示すためだと思われる。“Voyages”の初版は、巡礼始祖たちが新大陸に渡来する以前のニューイングランドの歴史を扱い、この上ないほどの詳細な記述を含み、4つ折り判で160頁にもわたる章が設けられているのであるが、ソローは、アメリカの歴史家たちやプリマス・ロックの礼拝者はその初版の存在を知らなかったということの問題視している。ソローは巡礼始祖が渡来する以前のニューイングランド史を記したフランス人による綿密な報告書にアメリカの歴史家たちが目を向けていないことに批判的な姿勢を示しているのである。アメリカの歴史家であるジョージ・バンクcroft (George Bancroft) については、“Bancroft does not mention Champlain at all among the authorities for De Monts’ expedition, nor does he say that he ever visited the coast of New England.”と述べ、バンクcroftはド・モンの遠征の権威者の一人であるシャンプランの名を挙げることもせず、シャンプランがニューイングランドの海岸を訪れたという事実を記してもいないと指摘する (CC 179)。さらにシャンプランの“Voyages”の初版が見過ごされてきたことに対するソローの指摘は、“Holmes, Hildreth, and Barry, and apparently all our historians who mention Champlain, refer to the edition of 1632, in which all the separate charts of our harbors, & c., and about one half the narrative, are omitted. . . .” (CC 179) と続いており、シャンプランの名前を挙げる他のアメリカの歴史家たちはみな、ニューイングランドの海図を含めて探検の記録の半分が省略され、また、巡礼始祖の新大陸への到着よりも後年となる1632年に出版された“Voyages”を参考しているということ、ソローが問題視していることが推察される。ソローは巡礼始祖たちの子孫に対しても手厳しく、巡礼始祖たちが新大陸に到着する前に、彼らの隣のわずか300マイル離れたポール・ロワイヤル (Port Royal) にはフランス人の植民地がすでに存在し、その植民地の建設者たちは巡礼始祖たちに劣らない不屈さを発揮し、巡礼始祖たちよりも16年早い1604年から1605年にかけての最初の冬を越冬したにもかかわらず、彼らの偉業を讃えた者は一人もいないことを指摘した上で、“... the trials which their successors and descendants endured at the hands of the English have furnished a theme for both the historian and poet.” (CC 182) と述べ、イギリス人の手に落ちた巡礼始祖の後継者や子孫たちが耐え忍んだ試練は歴史家と詩人には都合の良いテーマを提供してきたのであると皮肉を述べている。このようにソローは、巡礼始祖の後継者や子孫たちは当時のニューイングランドの過酷な自然と共生してきた先達の歴史にはほとんど関心を示さず、歴史家や詩人たちも同様に、巡礼始祖には光を当てる一方で、それ以前の歴史的事実の記述は怠ってきたということ容赦なく指摘している。ソローは、アメリカの歴史家による歴史の観方には偏りがあり、その地と人間の関連を歴史的に公平な視点で見えていないということに対して批判的な目を向けているのである。

信仰の自由を実現するための巡礼始祖たちの新大陸開拓は、シャンプランなどの探検家たちに比べると、ソローの目から見れば快適で便利な住環境を手に入れるための文明中心主義的な模索に過

ぎなかったと考えられる。アメリカの歴史家たちもまた、北アメリカ大陸を冒険心とともにありのままに探検し、その詳細な記録を残しているフランス人探検家の記述を参照していないことから、ソローにとって、歴史家の見解や観方には偏重があると思われたのではないか。それはあたかも、アメリカの歴史家たちは、アメリカの植民地建設ひいては文明国家の形成により直接的に寄与した巡礼始祖たちには目を向けているが、他方、それ以前に新大陸を探検したヨーロッパ人の歴史については、一見無頓着であるという、文明中心主義を窺わせる姿勢に対するソローの批判的見解を物語るかのようでもある。巡礼始祖やアメリカの歴史家たちはソローにとって文明中心主義的な一側面を想起させたのであり、人間の精神性の純化につながるような歴史的動機がそこに感じられなかったのではないだろうか。

## まとめ

コッド岬への旅はソローにとって大きく分けて3つの問題を考察する契機になったと言える。1点目は、海難の犠牲者たちについての考察である。セント・ジョン号に乗った移住者たちは、文明化された生活を切り開こうとするのであるが、彼らが乗っている船は自然の抵抗によって難破させられるという逆説的な図式が浮かび上がる。ソローは死者たちに弔意を表明するのに吝かではないが、むしろ死者たちが災難の結果、この地上を離れて天上に赴くことを祝福しているようにも見える。2点目は、天上的な灯台の光への賞賛と灯台守への苦言である。灯台の光は海上交通の安全という文明の発達にともなってますます重要な役割を担うのであるが、ソローの目は、その光をむしろ人間と天上的なものを結びつける超越的な光として見ようとする。それゆえソローは、灯台守に、新聞に象徴される地上的な文明のメディアよりも聖書に親しんで欲しいと要望するのである。3点目は、本著作の最初の主題に回帰するかのように語られる新大陸への移住にかかわる問題である。ソローの目から見ると、コッド岬に上陸しようとしたかつての巡礼始祖たちは、高邁な建前はともかくとして、ソローの同時代の移民と同様、きわめて世俗的で地上的な理由によって新大陸への移住をもくろんだ。アメリカの歴史家たちも、巡礼始祖以前のニューイングランドの歴史に目を向けていないことから、ソローにとっては巡礼始祖たちと同様に物質文明中心主義を想起させたのである。これらの3点の問題の考察をとおして浮上するのは、肉体や物質よりも精神を優位とするソローの思想の一端に裏付けられた、文明や文明人に対する批判的な見解である。

本著作の最後でソローは、コッド岬の海辺の魅力に思いを巡らせている。ソローはコッド岬の旅を振り返り、“Here is the spring of springs, the waterfall of waterfalls. A storm in the fall or winter is the time to visit it; a light-house or a fisherman’s hut the true hotel. A man may stand there and put all America behind him.” (CC 215) と本著作を締め括っている。コッド岬の海辺には野性の真髄が存在するのであり、だからこそ、秋や冬の嵐が吹き荒れる真只中にこの地を訪れると良いのであり、灯台や漁師の小屋が真の宿泊所になるだろうとソローは述べる。そこに立ちさえすればアメリカ全土に背を向けることになるのである。自然への回帰を訴えるかのような、このメッセージは、ソローにとってコッド岬への旅がいに文明国家アメリカにおける生活とは隔絶されたものであったかを物語っている。コッド岬の海辺を求めて、ソローは再び、その地に舞い戻ってゆくのである。

## 注

\* 本稿に引用した外国語文献の日本語訳は、注記のない限り、拙訳による。その際、既存の邦訳を参考にした。

- 1 以後、CC と略記。
- 2 またソローは1850年7月半ばにラルフ・ウォルド・エマソン (Ralph Waldo Emerson) の依頼により、ヨーロッパから帰国途中に船が難破し死亡したマーガレット・フラー (Margaret Fuller) の遺体や所持品を回収するためコッド岬を訪れている。フラーはエマソンやソローなどが加入していた超絶主義者たちのグループである“The Hedge Club”の一員で、機関誌 *The Dial* の編集者を務めていた (Harding 68, 277)。
- 3 ヨーロッパから新大陸に移住した民族は多岐にわたるが、ソローの著作でしばしば言及されるのはアイルランド人である。メアリー・ベス・ノートン他によると、「アイルランドは、ヨーロッパのなかでもっとも人口密度が高く、またもっとも貧しい地域の一つだった。(中略) 一八四五年と一八四六年に、アイルランド人の主食であるジャガイモが、畑で腐っていく病害に襲われた。一八四五年から一八四九年にかけて、飢餓、栄養不良、そして発疹チフスによって、大量の死者が出た。全体で一〇〇万人が死亡し、およそ一五〇万人がアイルランドから脱出したが、そのうち三分の二は合衆国に逃げた。人間がアイルランドの主要な輸出品となった」(201)。
- 4 Dwight B. Heath によると *Mourt's Relation* は “a valuable ethnographic document” と見なすことができるが、作者不詳である (ix-x)。
- 5 ソローが引用した以上の文章は、*Mourt's Relation* の中で最も長い、“A Relation or Journal of the Proceedings of the Plantation settled at Plymouth in New England.” と題された報告からのものである。この報告は巡礼始祖たちが1820年9月6日にイギリスのプリマス出航後、航海中を含めて6か月の間に経験した出来事、“Mayflower Compact” への署名、港の観察、西方へ向かってコッド岬よりも好ましいと思われる港に投錨したこと、インディアンの首長マサソイトと友好関係を結んだこと等が記録された、プリマス植民地形成にあたっての背景や経緯が把握できる部分となっている。
- 6 ソローも “Provincetown” において、その地の民家や商店の様子について綿密に観察し、“The outward aspect of the houses and shops frequently suggested a poverty which their interior comfort and even richness disproved.” (CC 170) と述べ、建物の外観は住民が貧しさを示していたが、内部には快適さや豊かさを示すものが窺えたことを明記している。プロヴィンスタウンの住民は、ソローが *Walden* で表明したように、文明社会において物質面では豊かな生活を送りながらも「静かな絶望」 (“quiet desperation”) (8) に陥っている人間像とは相反する。巡礼始祖たちとソローには、一世紀ほどの時間の隔たりはあるものの、コッド岬の住居や住人に対する観察眼には相違点があることは否めない。
- 7 Curtis P. Nettels によると、シャンプランはカナダに植民地を建設したフランス人の航海者であり、地図の作成者であり、ヘンリー四世の友人であった。シャンプランは1604から1607年の間にド・モンのアカディアへの遠征に参加したときにその地域をニューイングランドに至る遠い南方まで探検し、地図を作成した。シャンプランはこの地域は毛皮の貿易に適さないと判断し、セント・ローレンス (St. Lawrence) に向かうようド・モンを説得した経緯がある (206)。

## 引用文献

- Bradford, William. “Of Plymouth Plantation.” *The Heath Anthology of American Literature*, edited by Paul Lauter, et al., vol. A, Houghton, 2006, pp. 326-46.
- Breitwieser, Mitchell. *National Melancholy: Mourning and Opportunity in Classic American Literature*. Stanford UP, 2007.
- Dean, Bradley P., and Ronald Wesley Hoag. “Thoreau’s Lectures Before *Walden*: An Annotated Calendar.” *Studies in the American Renaissance*, edited by Joel Myerson, The UP of Virginia, 1995, pp. 127-228.
- D’Entremont, Jeremy. *New England Lighthouses: A Visual Guide*. 1997-2017, <http://www.newenglandlighthouses.net/>.
- Harding, Walter. *The Days of Henry Thoreau: A Biography*. Dover, 1982.
- Heath, Dwight B. Introduction. *Mourt’s Relation: A Journal of the Pilgrims at Plymouth*, Applewood, 1963, pp. vii - xvii.

- , editor. *Mourt's Relation: A Journal of the Pilgrims at Plymouth*, Applewood, 1963.
- Nettels, Curtis P. *The Roots of American Civilization: A History of American Colonial Life*. Meredith Publishing Company, 1963.
- Schneider, Richard J. "Cape Cod: Thoreau's Wilderness of Illusion." *Emerson Society Quarterly*, vol. 26, 4th Quarter 1980, pp. 184-96.
- Schneider, Ryan. "Drowning the Irish: Natural Borders and Class Boundaries in Henry David Thoreau's Cape Cod." *American Transcendental Quarterly*, Sept. 2008, pp. 463-527.
- Thoreau, Henry David. *Cape Cod*. Edited by Joseph J. Moldenhauer, Princeton UP, 2004.
- . *The Maine Woods*. Edited by Joseph J. Moldenhauer, Princeton UP, 2004.
- . *Walden*. Edited by J. Lyndon Shanley, Princeton UP, 2004.
- Walls, Laura Dassow. "'As You Are Brothers of Mine': Thoreau and the Irish." *The New England Quarterly*, vol. 88, no. 1, Mar. 2015, pp. 5-36.
- 今福龍太『ヘンリー・ソロー ー野生の学舎ー』、みすず書房、2016年。
- 大貫隆他編『岩波キリスト教辞典』、岩波書店、2002年。
- 奥田穰一『森と岬の旅人 ーH. D. ソロー研究ー』、桐原書店、1993年。
- ノートン、メアリー・ベス、他『アメリカの歴史②合衆国の発展』本田創造監修、白井洋子、高橋裕子、中條献、宮井勢都子訳、三省堂、1996年。